

(2) セグメントスケール項目

1) 付着藻類（調査日 春季：平成 28 年 5 月 25～27 日(但し、①横石・②下代瀬・③坂本橋は 6 月 2 日)、冬季：平成 29 年 1 月 10～11 日(但し、①横石・②下代瀬・③坂本橋は 1 月 12 日)

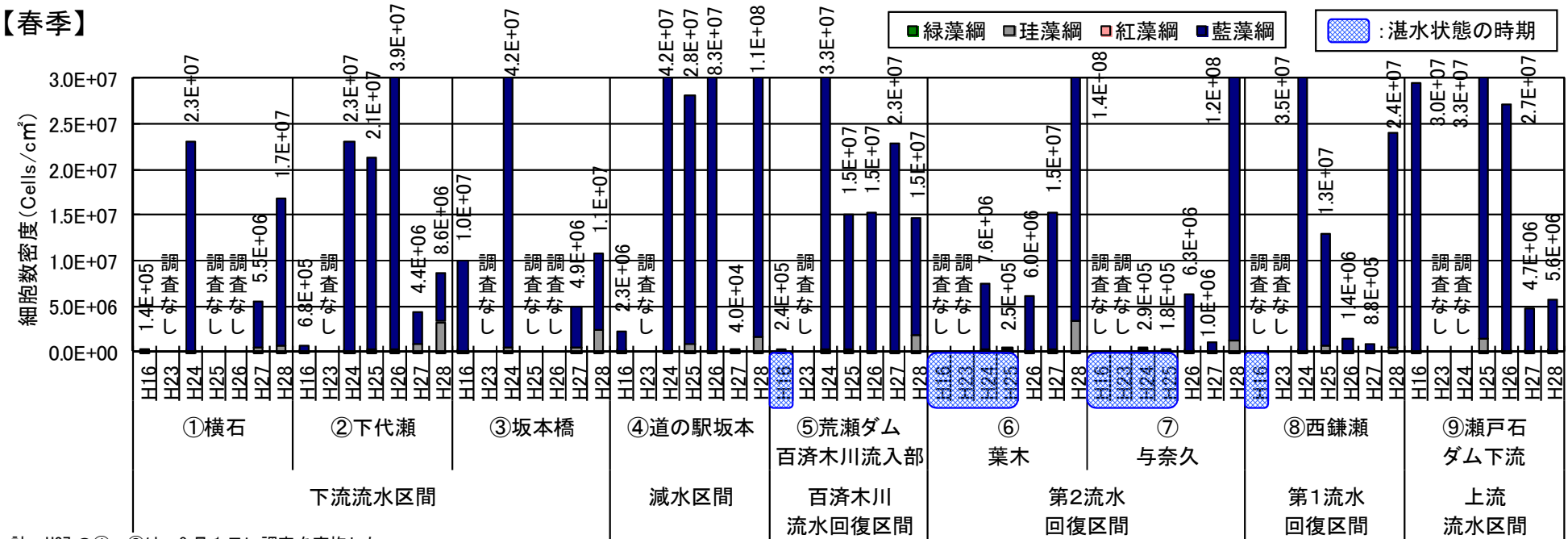
【参考資料 I-143 参照】

1 付着藻類

評価項目	視点	平成 28 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着藻類の細胞数密度	・全区間において、出水に応じて変化している。 ・ダム上流地点のうち元湛水区間の⑤～⑧では、湛水状態の時期と比較して、流水状態の時期は細胞数密度が増加している。 ・構成種は藍藻綱の割合が高く、冬季は春季に比べて珪藻綱の割合が大きくなる傾向がみられた。	・ダム下流において、ダム撤去による影響（ダムに溜まったシルト等の細粒土砂の堆積による影響）はなかったと考えられる。 ・ダム上流では、付着藻類が継続的に生育しており、瀬戸石ダム下流と同じように変化している。

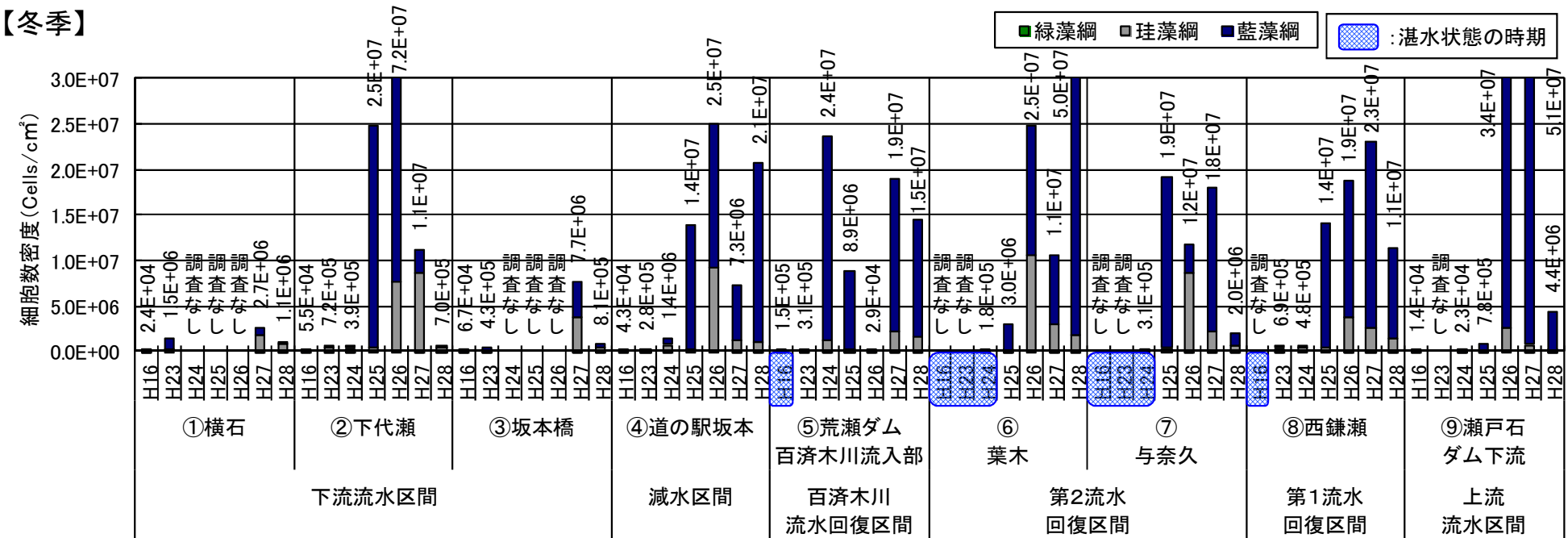
付着藻類の細胞数密度

【春季】



註：H27の①～③は、8月1日に調査を実施した。

【冬季】



【用語の解説】

- ・藍藻綱：細胞の中にははっきりとした核のない原核生物であり、群体を形成し黒っぽく見えることが多い。流速が速く、石礫上に堆積物が少なく、アユによる摂食が盛んな箇所で優占していることが多い。代表種として、*Homoeothrix janthina* (ホモエオスリックス・ヤンチナ) が挙げられる。
- ・珪藻綱：ガラスの成分である珪酸でできた殻を持ち、黄褐色に見えるのが特徴である。流速が比較的遅く、古い石の付着物が残る箇所で多い傾向にある。代表例として、*Gomphonema* 属(クサビケイソウ属)が挙げられる。
- ・緑藻綱：細胞中に緑色の色素を多く含むことから、色鮮やかな緑色に見えるのが特徴である。この仲間の中には、大型糸状緑藻となって繁茂し、アユの餌となる藍藻や珪藻が付着する石を被うカワシオグサがある。

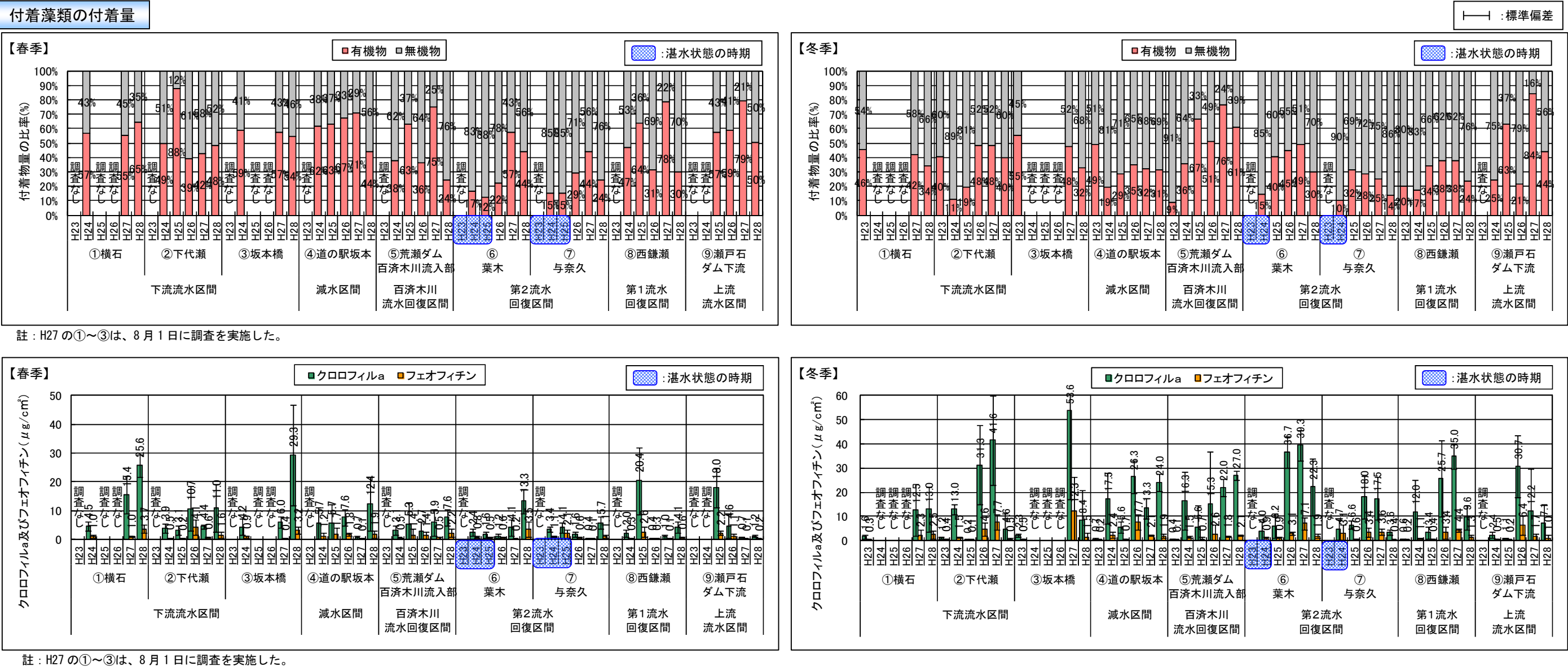
Homoeothrix janthina



- ・淡水、付着性、低地から山地まで。流水に多く、湿岩上に生育することもある。汎布種。
- ・日本国内に広く分布する着生種。
- ・本邦河川の瀬における最も代表的優占種。

2 付着物

評価項目	視点	平成 28 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着物量	・有機物の割合は、ダム下流では、コントロール区間である瀬戸石ダム下流と同じように変化している。ダム上流も同様であるが、特に「⑥葉木」では、湛水状態の時期に比べ高い状態を維持している。	・ダム下流において、ダム撤去による影響（ダムに溜まったシルト等の細粒土砂の堆積による影響）はなかったと考えられる。 ・ダム上流では、瀬戸石ダム下流と同じように、有機物、クロロフィル共に増減を繰り返しており、流水性の水生動物の生息環境が成立していると考えられる。



【春季】

■クロロフィルa ■フェオフィチン

■: 湛水状態の時期

【冬季】

■クロロフィルa ■フェオフィチン

■: 湛水状態の時期